

## 平成15年度 教育シンポジウム記録

平成15年11月8日(土)と9日(日)の両日行われた昭和女子大学の秋桜祭に、初等教育学科の学生は次の企画で参加をした。「手作りおもちゃ」(全体企画)、「世界の遊び」(有志企画)、「エプロンシアター」(有志企画)、「幼稚園・小学校シンポジウム」(実行委員会企画)。

これらのうち、教育現場で活躍されている初等教育学科の卒業生たちをシンポジストとしてお招きし、体験や知恵を語っていただいた「幼稚園シンポジウム」と「小学校シンポジウム」の記録の一部を以下に掲載する。なお、企画においては以下の願いを持って臨んだ。

- ・幼稚園・小学校現場に働く現職教員の生の声を聞くことにより、教職を目指す学生がますます「教員になりたい」という意欲を強くすること。
- ・教職を目指す学生が、子どもたちの中から可能性を引き出せる教師になること。
- ・教職を目指す在校生と卒業生たちの間に絆が生まれること。
- ・学生が教職に就いた時の不安を取り除き、希望を持って勉学に励めるようになること。

### 小学校シンポジウム

#### テーマ：「小学校教諭の魅力を語る」

日時 平成15年11月8日(土) 14:00~16:00

場所 大学3号館 3S02教室

#### シンポジスト

酒井眞理子先生	世田谷区松沢小学校校長	(昭和41年度卒業)
佐野智美先生	港区白金小学校教諭	(平成5年度卒業)
篠原洋子先生	品川区立八潮南小学校教諭	(平成12年度卒業)
大石巳織先生	町田市立鶴川第一小学校教諭	(平成15年度卒業)
司会	阿部聖華(人間教育学専攻2年)、渡辺真末(人間教育学専攻2年)	

#### 【小学校教諭の魅力とは】

まず、小学校教諭の魅力について先輩方はどう考えているのかを伺った。酒井先生が教師になったのは、「子どもが好き」という理由からだ。教師の魅力として「生きている子どもと一緒に生きられる素晴らしさ」をあげられた。子どもたちから学ぶことも多くあり、この仕事に「生きがい」や「やりがい」を感じている。「生涯学べる日々」であることをありがたいと思っている。

佐野先生は、「毎日笑ったり怒ったり泣いたりという喜怒哀楽が出せること」が教師の仕事のおもしろさだと感じている。また、「出会い」をたくさんもてることがいいと言われる。

篠原先生は、2年間非常勤講師をしながら、アルバイトなどをして平成15年度から正式に教諭として採用された。2年間非常勤講師をしたのは、「教師をやる前にいろいろ経験したい」と思ったからだ。その経験は、篠原先生の中で大きなものだった。教師の魅力は、「人との出会い」、そして心強い仲間(同僚)がたくさんいることだと言われる。

平成15年度に卒業したばかりの大石先生は、今、1年生を担当している。入学式では、子どもたちと共に保護者と対面した。最初の頃は「何をしたらいいのだろうか?」と毎日ドキドキだった。初めて小学校で学ぶ子どもたちにいろいろと教えたり、反対に子どもからも学んでいったりした。それから7ヶ月たって子どもたちは随分立派になったが、それは子ど

もたちは毎日一生懸命だからなんだと心から感じ、先生になってよかったとつくづく思っている。

### 【子どもたちとの出会いは、日々感動の連続】

日々の子どものやりとりで感動したことや、とっておきの思い出話などを伺った。

大石先生は、一番感動したこととして、5月くらいに植えたサツマイモの苗が成長し、そのサツマイモ掘りをして食べた時のことをあげた。家庭科室で料理をしたときに、いつもは給食ではあまり芋は食べないのに、みんな楽しみにわくわく待っていて、食べて「おいしいね」と言うだけでなく、子どもが「みんなで一緒に食べるからおいしいんだよね」とか「一緒に最初から作ったからおいしいんだよね」などと、心から言っていたことがあった。周りの子どもたちも「そうだよね。だってみんなで作ったんだもんね」とニコニコしながら食べている姿や、いつもは食べないお芋をおかわりして「足りない。足りない」と言っている姿をみて、子どもって本当に素敵だなと感じた。

2年生の担任をしている篠原先生は感動だらけの毎日であるという。子どもの数が10人と小さいクラスだ。小学校自体単学級で、各学年1クラスしかない。他の学年は20人くらい子どもがいるが2年生だけ特別少ない。そんな環境の中で、2年生たちは、なかなか自分を出せない。1年の頃担任をしていた先生から「ちょっと自分を出すのが苦手な子どもたちだけれども、いい子たちよ」と言われ、引き継いだ。そんな子どもたちだからこそ、本当に小さな喜びがたくさんあるという。

実際、授業中、立って発表するのにもモジモジしてしまう子が多かった。そこで、篠原先生は、根気よく明るく励まし続けた。すると子どもたちに変化が現れた。学芸会に向けて練習を始めたとき、台詞をきちんと覚えてみんなの前に立って言うという試みをした。はじめての試みであったが、みんな(9人)が見ている前で発表したら、4月と比べたら何倍もの大きな声で言えた子がたくさんいて、「今までいろいろ子どもたちと接してきてよかったな」「私が今までしてきたことはよかったんだ」と実感した。

佐野先生も2年生の担任をされている。佐野先生の場合は、1年生の入学式のときから受け持っているので、本当に毎日が感動だという。1年生を初めにもって2年生に上がると、まっさらな子どもたちの成長がよくわかる。佐野先生は、朝の会で必ず朝の歌を歌うようにしている。子どもたちには1日1回大きな声で、空気を吸ってちゃんと出すということを朝のうちにさせているのだ。2年生になってからは、子どもたちのリクエストで歌っている。振り付けも一緒にやって朝からすこぶる元気のいい2年4組である。もうそれだけで、ふと涙が出そうになるような瞬間があると佐野先生は言われる。そんな日々の何気ないことに感動できるのが教師という仕事だ。佐野先生は、高学年をもった時は、「朝の連続小説」と称して必ず毎日読み聞かせをした。『五体不満足』(乙武洋匡著)を毎朝、5分くらいの時間を使って子どもたちに読んで聞かせていた。

酒井先生は、先程「生きている子どもとともに生きられる仕事は素晴らしい」とお話しくださったが、実は、結婚して最初の子どもの死産された。その後、学校へ行行って、元気な子を前にした時はもう胸がいっぱいになったという。生きていることがこんなに素晴らしいことかとそのとき実感した。それからは、どの子も生きているだけで素晴らしいと感じる日々であるという。今は学級担任ではないので校長室にいるのだが、ある日、教頭先生が作ってくれた書類をずっと真剣に読んでいて、ふと顔を上げたら、5年生のY君がいてニコッとしたので、うれしくなって2人で笑い合ったという。実は、Y君は1年生の頃から学校に来られなくなり、3・4年はほとんど来ていなくて、5年生になってだいぶ来られるようになり、朝、玄関のところに座っていたりするのだが、その前日にはじめて自分から来たのであった。それだけに、とてもうれしかった。それから少しおしゃべりしていると、給食の時間になった。Y君はみんなと同じ給食が食べられないので、いつもお弁当をリュックに入れてきている。酒井先生が、机の上に置いてある給食を見て、「ここにお弁当持ってきて一緒に食べる?」と聞いたら、「うん」と言ったのだとうれしそうに話してくださった。

### 【「私メッセージ」と「あなたメッセージ」】

「子どものかかわりの中から学んだこと」について伺った際に酒井先生が1つのエピソードをお話しくださった。酒井先生は子どもの前に立つ時は、子どもは自分の鏡だと思っていると言われる。子どもがつまらなそうな顔をしていたら、自分の話がつまらないんだな、わからなそうな顔をしていたら、自分の授業がわからないんだなと捉えているという。子どもは、こちらの働きかけ次第でやる気にもなるし、やる気をなくすこともある。

トーマス・ゴードンの『親業』という本の中に、「あなたメッセージ」と「私メッセージ」というのがある。「私メッセージ」というのは、「私はあなたにこう思うわ」というメッセージで、「あなたメッセージ」というのは「あなたはこうなのでしょ」というメッセージ。考えてみたら、酒井先生は子どもたちに、ずっと「あなたメッセージ」を送ってきたと思うという。「あなた宿題を忘れたでしょ」とか「あなたはこうでしょ」という場面が多かった。「私メッセージ」の大切さを読んだとき、早速やってみようと思った。



ある時、6年生のT君が「宿題を忘れました」と言ってきた。その時に「よし、今日からは私メッセージを送ろう」と思って、「そう、宿題忘れちゃったの。私はとっても寂しいな」と話しかけた。私メッセージを送ったのである。すると、「うん。僕ね、途中までやったの。でもね、3番までやったの。5番まで宿題だったんだけど、4番と5番はわからなかったの」と言ったのだ。「ああ、これだ！」と酒井先生は思った。子どもから学んだ。本当は言いたいのにも、聞く耳を持っていなかった。受け止める気持ちを持っていなかったことを目の前のT君から学ばせてもらった。それから全て、子どもたちに「私メッセージ」を送るように心がけた。すると、子どもたちとの関係が劇的に変わっていった。クラスの雰囲気も劇的に変わっていった。その後、教頭になり、校長になってもこれはいつも心がけている。

#### 【楽しい授業作りのために】

先輩たちは毎日の授業でどのような工夫をされているのかを伺った。

佐野先生は、「日々の授業は本当に楽しくなくてはいけない」と思っている。そして、授業作りは、何か新商品を作り出すプロデューサーにでもなった気分に取り組んでいる。

佐野先生は「生き物を育てる」という生活科の授業を例にあげてくれた。子どもは生き物が好きな子が多いが、中には嫌いな子もいる。また、土が嫌いだったり、昆虫が触れなかったりする子もいる。ザリガニなどは育てるのに恰好の生き物なのだが、「ザリガニなんて嫌」という子もいる。どうやったら、その子たちに「かわいい」「命を大事にしたい」という心が育つかと思いを巡らしたりしていた。そこで、佐野先生は、クラスにお世話に来てくれる6年生にザリガニの居場所を聞いて、一緒に釣りに行った。佐野先生自身もザリガニにはあまり触ったことはなかったのだが、一緒に釣りに行ったらとても楽しくて、つい夢中になり、だんだんザリガニがかわいらしく見えてきた。それで、子どもにもこれをやらせてあげようと、6年生にも手伝ってもらって、大きな水槽の代わりに、台をひっくり返してビニールシートを敷き、そこに水を入れて池を作った。そして、子どもたちと一緒にザリガニ釣り大会をした。子どもたちは、ザリガニをかわいがただけでなく、ザリガニを通して別の生き物にも少しずつ目が向くようになった。そんな楽しい思い出を語ってくれた。

篠原先生は、今年が1年目で、「毎日が必死」だという。過日、先輩の先生から、「結局、1時間の授業はきてしまう。自分が準備を一生懸命やっても何も準備が整っていなくても、1時間の授業は明日もきてしまう。だから、目の前の授業1時間1時間を本当に大切に見ないと過ぎ去ってしまう」と言われた。今、そのことを実感しているという。45分というのが本当に短くて、自分がきわめて気合を入れた授業も45分で終わってしまうし、そんなに準備ができなかった授業も45分で終了する。それならばなおのこと、準備の大切さが身に沁みている。

そして、先輩の先生から言われて身についたことが1つあるという。それは、自分も「めあて」をはっきりと持って、子どもたちにもそれを伝えることが大切だということ。例えば、「今日はこういうのをやるよ。最後にはこういうことができるようになるかもしれない」と言うようにすると、子どもたちの目も全然ちがう。授業の最後に「先生、これ、できるようになったね。はじめに言ってたのこういうことだったんだね。」と子どもたちが反応してくるのである。また、クイズのように問いを出しているので、「答えがわかったよ！」という子どもたちの反応もあり、楽しい授業ができています。

大石先生は、道徳の授業や国語の授業で、ただ教材を読むのではなくて、パネルにしたり紙芝居にするという工夫をし

ている。学校にも既製のパネルや絵はあるのだが、自分で製作したものの方がより子どもを引き付ける力をもっている。「へえ、先生そんな作ったんだ。すごいね。」と言ってくれたり、「これは何だと思う?」と聞いて、「モグラかなあ…?」というところから始まり、子どもはそのモグラがどうなっていくのかなとじっと見ていたりする。そのような子どもの姿を見ていて、自分で教材を作るようにした。

また、国語に「自動車くらべ」という教材がある。例えば、トラックだったら「後ろに荷台がついているね」「荷物を運んだり、積むお仕事をしているんだね」ということを学ぶ授業だ。クイズのようにして「この車は人をたくさん乗せる仕事をしています。お金を入れるところがあります。さあ何でしょう?」とすると、みんな「はい、はい!」とのってくる。答えはバスなのだが、子どもは「それ、作りたい。作りたい!」と言うので「これは、この勉強をしたら、最後に作れるようになるんだよ」と言うと、「じゃあ、早く勉強しよう」と言って、最後は子どもたちなりに救急車や幼稚園バス、タクシー、消防車などを作ったりした。

なるべく子どもたちが作りたいと思うものを作れるようにしたり、また1年生は長い言葉で話して聞かせてもなかなか集中できないので、目で見えるものだったり、ゲームのようなものを多く用意するように心がけて工夫している。

## 質疑応答から

### 【子どもの個人差にどう対処しているか】

(質問) 子どもの個人差やそれぞれの個性などで、特に授業中や日々の生活の中で気をつけていることがありますか?

佐野先生は、どんな学級にも子どもの差はあるが、その差をなるべく子どもたちに感じさせたくないと思っている。一斉授業ではなく、もっと小集団の中で発言できる場面をつくってあげるとか、その子が活躍できるような場面をいつも考えていなくてはいけないと思っている。もちろんよくわかる子にも活躍の場面をつくる。

現在、佐野先生の学級では算数に関して少人数制(習熟度別)のコース別授業をしている。佐野先生だけでなくもう一人講師の先生が補助についている。高学年になると、自分のやりたいところに挑戦するチャレンジコースなどを設けて、子どもが選択して授業を組み立てることに取り組んでいる。

### 【TTの授業の進め方】

(質問) TTでの授業の進め方などについて、お話しいただければと思います。

この質問には、酒井先生がお答えくださった。酒井先生の学校では、講師の先生に来てもらい、1~2年生はTT、3~6年生は少人数制という形で進めている。TTをするときにはT1とT2の先生がいるが、T1が指導をして、T2が補助にまわるのがだいたいパターン。このTTの指導では、互いの共通理解が大切である。例えば、「この子に対してはつまづいた時に、ちょっとしたヒントを与えてね」「この子にはもう少しヒントを与えないと次に進めないかもしれない」「この子には自分で考える力が付いてきているから、困ったなっていう顔をしている時以外はヒントを与えないで」など、互いの声の掛け合いがとっても大事。それがその子の学びにつながっていくのだ。

### 【掲示物への工夫について】

(質問) 掲示の仕方や先生が工夫されていることがあればお伺いしたいと思います。

小学校1年生の担任をしている大石先生がお答えくださった。1年生は背が低いので、子どもたちがよく見るもの(例えば、掃除や給食の当番表)は、なるべく可愛くしたり、低い場所に掲示したりしている。また、先輩の先生に「1・2年生はお誕生日列車というのがあると、とてもいいんだよ。」ということを教えていただき、実践している。大石先生は、季節のものを描いた画用紙に子どもたちのお誕生日の壁紙を作って貼っている。子どもたちがそれを見て、「今日は〇〇ちゃんのお誕生日なんだ。お手紙書いてこなくちゃ。」と言ったりしている。

### 【障害児との関わり】

(質問) 障害児と健常児のかかわりや、指導について教えてください。

この質問には、佐野先生と酒井先生からお答えいただいた。

佐野先生は、障害児がクラスにいと「大変」という思いと、「責任」という思いがあるといわれる。その子がいるから学べることがあり、いてくれてありがとうと思う場面もある。一人ひとりみんな違うということは障害児がいないクラ

スでもしっかり指導すべきだといわれる。

そのような指導に佐野先生は、道徳の時間を利用している。例えば、画用紙を配り○を書かせる。次に△、次に□を書かせる。そして見せ合いっこをすると大きさや並べ方など、様々な書き方をしていることに気付く。その時に「見てごらんみんな違う絵ができたよ。30人いたら30通りあるんだね。みんなもひとつとして同じところはない。違うところのほうが多いんだよ。」と話をするのである。

酒井先生は、先天的な障害で、車椅子や杖を使って歩いている子どもと同じクラスで生活した体験を話してくれた。その子が学級づくりの核になるのだという。その子とのかかわりがどうもてるかで、学級は大きく成長していける。「どうして歩けないの?」と聞かれたら、そのまま答えたらよいと酒井先生は言われる。「うん。この子は足が悪いのよ。これから少しずつよくなるからね。大丈夫よ。」

酒井先生は、毎日その子の日記をつけて、毎週校長先生に見せていた。ある体育の時間に、「私もう1回生まれ変わることができたら、今度は元気に歩けるようになりたいな。」と寂しそうに言ったことがあった。その子は4年生だったが、自分はどうしてこのように生まれてきたかということについて理解が進んでいた。4年の最後の道徳の授業で、テレビ番組の教材をみんなで見たら、彼女は何かを見つけてとても感動し、家に帰って泣きながらその内容をお母さんに話したという出来事があった。それまで車椅子を押してもらっても「ありがとう」と言えなかったが、その時から「ありがとう」と言えるようになった。体育でラインサッカーをした時、最後にその子がキャプテンに立候補した時は驚いた。なかなか授業ではプレイすることはできなかったが、その子がキャプテンになった。それまではカードめくりとか、審判までしかしたことはなかったが、今まで見ていた事を一生懸命生かして、「この作戦でいこうね。」「こういう時はドンマイっていうんだよ。」といきいきと役をこなしていた。その子によってクラスは変わっていったし、多くの学びになった。

#### 【昭和での学びが、教員になってから役立っていること】

昭和学園における学びは教師になった時に役に立っているのだろうか。4人の先輩方に伺った。

大石先生は、幼・小をひとつのスパンとして見ることができる点をあげた。低学年の子どもに対して、幼稚園でどんなことをやってきたかがわかるので、次はこういうことにチャレンジしたいのではないかと考えることができる。児童文学の授業で作った紙芝居を現在も活用している。仕事に就くと、授業の準備以外で物を作る時間がなかなか取れない。だから学生時代に作ったものは大切にしておいて活用してほしいというアドバイスをいただいた。

篠原先生は、ノートと教科書はしっかりとって残してあると言われる。後から開いて見ると身にしみることばかりで、「あーこういうことだったんだ」と納得したり、励みになったりして、宝物になっている。例えば、小川先生の「認め・誉め・励ます」を覚えている。本当にこの3つがそろっていなければだめだということを実感している。先生のおっしゃる一言一言を大切にしてもらいたい。

佐野先生は、大学の授業で先生方が余談で話す体験談を思い出すことが結構あり、ヒントになったり、指針になったりしているという。また、教員になってからは同年代の人たちと話すことがなかなかないので、大学の友達を大切にしてほしいとアドバイスしてくれた。自分の味方にもなり、悩んだり困ったりしたときにいい関係でいられるといい。

酒井先生は、昭和では、厳しさと、忙しさを教えられたという。当時はみんな黒のスーツだった。唯一おしゃれできるのが、中に着るブラウスくらいだった。授業は7時間くらいあった。本当にまじめに、真剣に勉強したという。学校が終わった後も、ピアノを習ったり、サークル活動をしたり忙しい日々だった。それから数十年毎日忙しい日々をすごしている。昭和での学びの基礎は、今でも生きていられると言われる。

#### 【今に生きている学生時代の体験】

学生時代の体験が教職に就いた時にどのように生きているのだろうか。「学生時代に何をしたらよいか」を含めてお話しいただいた。

篠原先生からは、まず「本を読むこと」を勧められた。本を読むことで知識を得ること、文字に触れることが大切。また、TTや補助の講師などの依頼や募集があった場合は積極的に体験してほしいと言われた。実習校の行事のお誘いは、行ってみると勉強になることが色々ある。

大石先生は、大学時代に、選挙の受付、試験監督、歯医者さんや保育園でのアルバイトなど色々やったが、どれも役立

っているという。子どもとかかわるアルバイトはもちろんのこと、お店で働いていた時には、売り物にはこんな秘密があるんだと発見できたりして面白かった。教員になると夏休みに初任者の宿泊研修があるが、ここでは昭和の学寮研修の経験が役立った。また、課題研修があって、民間企業に行って働く経験もした。大石先生は、スーパーで働いた。その経験は、周りの生活環境を知ることや、子どものお母さんの仕事を知り、どの時間帯は忙しいかがわかるなど、いろんなところに目を向けるチャンスになっている。

大石先生の話聞いて、佐野先生も課題別研修で法律事務所に行ったのを思い出した。弁護士さんについて裁判所へ行き、なんだかドラマの主人公になった気分だったという。教員はなかなか他の仕事を見る機会が少ない。だから思い切っているような経験を学生時代にしておくといい。総合的な学習の時間に、「いろんな見方でプロデュースしてください」と言われる。でも学校の中にとると、どうしても狭い視野になりがちである。学生時代に広い視野をもち、いい人間になれるよう、時間を有効に使っているようなことにチャレンジしてほしい。

酒井先生は、教員は人間としての幅の広さが求められ、また、サービス業のような気持ちをもっていないとやっていけないという。それゆえ、TTやインターンシップなど、大学がもっと教育委員会と連携して、小学校の側で、補助の先生がほしい時に大学に連絡するとすぐ来てくれるようなシステムを作ってもらいたいといわれた。

### 【後輩へのメッセージ】

大石先生は、来年は初任者が何人来るか、ワクワクしているという。「若い先生がいるだけで子どもは喜ぶ、元気いっぱいだったらそれだけでいいんだよ。最初に勤めたところでいっぱい失敗したほうがいい。いろいろやりなさい。」とよく先輩先生に言われる。「待っていますので、ぜひ教師になって来てください。」

篠原先生は、事前にお送りした質問事項のプリントに、「土日も仕事があり、遊ぶ暇などないですか？」とあったことを取り上げた。確かに教員は忙しい。でも、篠原先生は、「時間は作るものだ。遊ぶ暇がなかったら作ればいいじゃないか」と先輩から言われたことがある。つまりは要領を早くつかんで時間を作ればいいわけだ。よくよく考えると、忙しい忙しいと言っている、遊んでいる自分がいたりする。「大丈夫です。遊ぶ時間はあります。楽しい仲間が待っています。」と言ってくれました。

佐野先生は、土日は仕事の日もあるけど、仕事をしない日も決めることも大切だという。遊ぶ、旅行にも行く、習い事もする。高校の時バスバンドをやっていたので、またフルートを習い始め、テニスも始めた。学生時代に、「先生になりたい人は必ずなれる！」と言われたことがある。現場で、先生になりたいという講師の先生によく会うが、そういう人は必ず先生になっているという。「なれると思っていれば、いつかなれると信じて頑張ってください。いつか同じ学校で会えたらいいですね。」

酒井先生は、新しいことにチャレンジしてみたいという気持ちで仕事をしている。ご主人から、「学校に遊びに行っているじゃないの？」とよくいわれる。酒井先生は家でよくクラスの子どもの話をする。話をしていると、「あーそれは〇〇ちゃんの話だね。」とご主人がわかるくらいだ。趣味が仕事、仕事が趣味みたいなもので、土日もほとんどない。たまに土日に家にいると、お嬢さんから「あれ？学校は？」と言われてしまう。酒井先生にとって教員はそれだけ魅力のある仕事なのである。心が通い合うというのは嬉しいこと。そこには様々な形の愛が生まれる。それは生涯の課題であり、共に追求していけたらいいなと思っている。「子どもは本当に素直。一緒に頑張りましょう」と励ましてくださった。

### 【お越しいただけなかった先輩方からのメッセージ】(順不同)

昭和40年度卒 小林葉子先生(墨田区立柳島小学校長・柳島幼稚園長)

『教師というより、人間として大切な言葉は、使命感・情熱・奉仕の心だと思います。』

昭和41年度(日本文学科)卒 小野寺文子先生(多摩市立大松台小学校長)

『魅力ある小学校教師とは…①明るく元気はつらつとしている ②得意なことをもつこと ③子どもと共にいることを楽しむこと』

昭和44年度卒 鈴木悦子先生(練馬区立石神井東小学校)

『教育現場も厳しくなっておりますが、子どもたちの明るい笑顔と輝く瞳にエネルギーをもらったり、希望をみつけな

から、毎日小さなことを積み重ねております。どうぞ後輩の皆さん、ぜひ教員になって一緒に勉強しましょう。お待ちしております。』

昭和40年度卒 市川三重子先生

『一昨年池尻小学校に勤務していたときに教育実習生と学ぶ機会があり、懐かしく思い、また、お手伝いさせていただきました。池尻小学校では同窓生の千原和枝先生が読み聞かせの指導で力を発揮されています。』

平成10年度卒 加藤由美子先生

『皆さんと出会うためにまっている児童達が必ずいます。最後まであきらめずがんばってくださいね！「先生大好き」と言ってもらえた時、本当にこの仕事を選んでよかったと感じます。』

昭和48年卒 富田貴志子先生（中央区立宇佐美学園副園長）

『昨年から宇佐美で勤務するようになりました。子どもたちが24時間の寮生活ですので、私たち教師も同じ敷地内に在る教員宿舎での生活です。（中略）今回のシンポジウムの中で、私の経験はたぶんあまり例のないものであり、またこれから教職を目指しておられる方々に健康学園の存在を正しく理解していただける絶好の機会だったなあと、ますます残念な気持ちになります。』

昭和43年度卒 大倉喜代美先生（品川区立大原小学校長）

『異動のため手紙が届いたのが大学祭の後でした。またこのような機会がありましたら是非参加したいです。』

昭和51年度卒 三浦佳津美先生

『学習する喜び、できる喜び、世の中のあるなことこんなことを伝えたい、という思いで取り組んでいます。教職を目指す皆さんには、たくさんの経験を積んだり今のうちに本を読むことをお勧めします。』

昭和48年度卒 角田由美子先生（葛飾区立宝木塚小学校）

『午後は久々に足を延ばしてみようかと思っております。少しでも、ご恩返しができることがありましたら、協力させていただければ幸いです。』

平成11年度卒 田中千史先生（台東区立谷中小学校）

『学生時代に小学生とかかわるアルバイト等をしてください。また、まったく違う世界を見るという意味でもさまざまな経験をしてください。』

（小学校シンポジウム記録作成：阿部聖華，渡辺真未，有村久春，松本淳）

## 幼稚園シンポジウム

### テーマ：「幼稚園教諭の魅力語る」

日時 平成15年11月9日（日） 10：00～12：00

場所 大学3号館 3S02教室

#### シンポジスト

中嶋泉先生 目黒区立みどりがおか幼稚園教諭（昭和54年度卒業）

千葉江美先生 千代田区立富士見幼稚園教諭（平成2年度卒業，平成3年度専攻科修了）

野村容子先生 中央区立泰明幼稚園教諭（平成3年度卒業）

馬場広子先生 江戸川区立小松川幼稚園教諭（平成6年度卒業，平成7年度専攻科修了）

司会 阿部聖華（人間教育学専攻2年），渡辺真未（人間教育学専攻2年）

#### 【幼稚園教諭の魅力とは】

中嶋先生が思う幼稚園教諭の魅力は、何よりも子どもと一緒に生活できること、また、たくさんのお母さん達や子どもと接していく中で、自分が少しずつ、成長できたことがこの仕事の魅力だと言われる。